

江東の樹木 ①

小名木川の開発と小名木川五本松

江東区深川江戸資料館

江東の地は、古くから江戸の人々の行楽の地として賑わってきました。寺社などの史跡と、樹木・水辺の風景・蛭・鶯・鈴虫などの自然がいまっ多く、多くの名所が江戸近郊に生れ、江戸時代中期以降人々を魅了します。

江戸東郊の江東の地は、水に恵まれ、名だたる寺社も数多く、寺社を核に樹木や花などの名所が点在しました。シリーズ「江東の樹木」では、江東の名所の有名な樹木を通じて、江東の歴史と人々の暮らし、自然環境などを考えていきましょう。

小名木川の開発

江東区を代表する河川、小名木川は、江戸時代初頭、徳川家康が江戸に来るとほぼ同時に開削されました。

荒川放水路と隅田川を結び、江東区域を貫いて東西一直線に掘られたいくつもの運河（ほとんど流れないのですが現行の河川法では荒川放水路側を上流、隅田川側を下流と規定しています）の中で、深川の開発ととりわけ大きな関わりを持つのが小名木川です。徳川家康の入府にともなって、行徳から江戸へ塩を運ぶ目的で開削されたといわれる小名木川は、大体それ以前の海岸線だといわれています。海岸線に沿って掘り下げて運河を造り、その土で運河以南を埋め立てるという手法で深川の地が造成されていく過程の最も初期に生まれたのが小名木川沿いの地域です。北岸の森下1-3-17の深川神明宮付近が「深川村発祥の地」として史跡登録されています。



『江戸名所図会』より小名木川五本松

当館蔵



安藤広重「小名木川五本松」

江東区教育委員会蔵

この地に住み着いた深川八郎右衛門が新田開発を行うことになったのが慶長元年（1596）のことといわれます。深川の開発は、小名木川の完成とともに慶長期（1596～1614）から始まり、明暦の大火後の万治3年（1660）に本所奉行が設置されて本格化していき、寛文期（1661～72）には多くの新田が成立しています。

小名木川沿いの武家屋敷

元禄（1688～1703）の頃には現在の深川の原型ができあがったといわれますが、その情景は、まだ開発途中の鄙びたものでした。松尾芭蕉は、この時期の深川で、有名な

古池や蛙飛びこむ水のおと

の句を詠んでいます。蛙が池に飛び込む音のほか何も聞こえない静寂が描写された俳句で、静かな田園地帯であった深川の情景が浮かび上がってきます。

しかし、いっぽうでは都市化が進み、農地であった深川村は、元禄検地を経て、正徳3年（1713）には慶長期の開発に始まる海辺大工町（清澄・白河・三好＝小名木川南岸）が、農村としての代官支配とともに町奉行の支配も受ける「町並地」となりました。このころから「江戸深川」という呼称も見られるようになります。

深川は、江戸湾・隅田川・小名木川の結節点で、倉庫には適した土地であったため、年貢として集められた米を江戸へ送り換金するための拠点としての「蔵屋敷」を深川に持つ大名も現われてきま

す。また、風光明媚な水辺の深川を愛し、別荘や下屋敷を深川に定める大名も増えていきました。表は、幕末の安政3年（1856）の史料に基づいて、当時の小名木川沿いにあった大名屋敷をまとめたものです。たくさんのお大名屋敷があったことがわかります。

小名木川五本松

このような小名木川沿いの大名屋敷のひとつに、綾部藩 19,500石（安政3年時点）九鬼式部少輔の下屋敷がありました。現在の猿江2丁目の小名木川沿い、四つ目通りに架かる小名木川橋から少し東に寄ったあたりです。この屋敷から川に、大きな松が枝を張り出し、枝振りの良い姿を水に映して有名でした。字名を五本松といったという記録もあり、『江戸名所図会』など江戸時代後期の地誌には必ず見えています。『江戸名所図会』の絵は、船を浮かべて月をめぐる人々の後ろに大きく枝を張った老木が描かれ、水に影をうつす松の姿は深川らしい情緒を醸し出しています。「五本松」という名ですが、描かれているのは1本です。『名所図会』では、昔は5株あったもの



小林清親「小名木川五本松」

江東区教育委員会蔵

が枯れて1本になったとしています。安藤広重や小林清親など多くの画家が「小名木川五本松」を描いていますが、どの絵も1本です。

水辺の風情とあいまって、多くの船が行き交う小名木川の景勝地としてその名を馳せた小名木川五本松は、明治40年（1907）に枯れてしまい、同42年、切り倒されました。枯死の原因は、工場の煤煙や洪水などであったといわれています。

江東区の木がクロマツと定められたのは、この小名木川五本松に由来しています。

小名木川沿岸のおもな大名屋敷（安政3年）

	藩名	石高	当主名	※屋敷種別	坪数	所在地	備考
北岸	尼崎藩		松平遠江守忠栄	下	5,000		深川万年橋際
	浜松藩	6万	井上河内守正直	中	4,932	深川六間堀	
	掛川藩	5万3千7百	太田攝津守資功	下	6,045	深川小名木川通	内7坪余は辻番所
	御三卿	10万	田安中納言慶頼	下	9,000	深川小名木川	
	土浦藩	9万5千	土屋采女正寅直	下	17,123	深川小名木川通	一部旗本土屋求馬へ貸す
	岸和田藩	5万3千	岡部筑前守長寛	中	2,943	深川小名木川新高橋	
	杵築藩	3万2千	松平市正親長	下	1,523	深川猿江町	
	古河藩	8万	土井大炊頭利則	下	4,491	同上	
	綾部藩	1万9千5百	九鬼式部少輔隆都	下	1,552	同上	五本松
南岸	田辺藩	5万5千	牧野豊前守誠成	中	1,500	深川万年橋際	
	下手渡藩	1万	立花出雲守種恭	上	2,000	海辺新田	深川で唯一の上屋敷
	館林藩	6万	秋元但馬守志朝	抱	6,443	同上	
	上田藩	5万3千	松平伊賀守忠固	下	3,524	深川小名木川	
	田中藩	4万	本多豊前守正寛	抱	1,609	八右衛門新田	
	烏山藩	3万	大久保佐渡守忠美	下	3,500	同上	
	岩村藩	3万	松平能登守乗喬	抱	2,350	同上	
	白河藩	10万	阿部播磨守正耆	抱	1,132	同上地続の町並	屋敷882坪所有
	会津藩	23万	松平肥後守容保	抱	3,293	同上	
	小倉藩	15万	小笠原左京大夫忠微	抱	7,336	同上	
	宍戸藩	1万	松平大炊頭頼徳	抱	2,776	同上	
	笠間藩	8万	牧野備前守貞直	下	10,716	久左衛門新田	
	吉田藩	7万	松平伊豆守信古	下・抱	16,694	同上	下屋敷に地続きの抱え屋敷をあわせて
	徳島藩	25万7千9百	松平阿波守齊裕	抱		治兵衛新田・亀高村入会	一部貸している
若桜藩	1万5千	松平（池田）淡路守清直	下	4,000	亀高村・荻新田入会	冠山	

※屋敷種別

上=上屋敷

中=中屋敷

下=下屋敷

抱=抱え屋敷

— 幕府からの拝領

— 大名が自分で買い入れた私有地

CD-ROM版『江戸東京重ね地図』（2001年 エービーピーカンパニー刊）より作表

原史料は、『諸向地面取調書』安政3年（1856）